『神主義』の大要

第一部

博士・張全鋒
台湾統一思想研究院　副院長
中国統一思想研究院　院長

A.『神主義』の概要

1.「神主義」とは何か？

1）「神主義」とは、冷戦後の民主主義と共産主義を超克するイデオロギーであり、来るべき統一世界社会の指針となるイデオロギーである。なお、統一世界社会とは、神を中心とする世界文化と、世界政府によって営まれる統一世界国家、および世界共同市場とをもつ、神のもとにある一つの世界に他ならない。

2）神主義の中核にあるのは「神は人類共通の親であり、人類は世界家族の兄弟姉妹であり、万物は人類の故郷であり所有である」という思想である。

3）神主義の四つの構成要素は、世界観的基礎、生活観、歴史観、世界社会観である。

2．神主義の世界観的基礎：心物合一論

1）神はこの世界と人類を創造した。

2）神の創造目的と人生の目的、宇宙の目的

3）普遍的法則

4）神と人類、万物の関係

3．完成した人間生活観：天人合一論

1）本然の人間生活、人間生活の堕落、本然の人間生活の復帰

2）人間存在、人間精神、人間本性、人間生活、人間社会

3）天と人との合一：天と人との非合一、天と人との再合一

4．神主義の歴史的基礎：統一史観

1）人類歴史の本質と目的および発展法則

2）人類歴史における神の摂理と人間の努力

3）中心史と周辺史

4）宗教史と政治史

5）真の父母の来臨と統一世界

5．完成した世界社会観：天国論

1）世界文化：神を中心とする、真なる愛の家庭に根差す新しい文化；科学と宗教とが統一された文化；心と物の統一された文明；東洋文明と西洋文明の統一された文明
2）世界政府と世界国家；神のみ言を中心とする世界憲法；アベル国連から世界政府へ；世界政府と地区政府、国家政府、地方政府；世界連邦
3）世界共同市場；世界ドルと世界経済政策、世界金融政策；「EC から EU へ」は、「世界共同体から世界連邦へ」の一モデルである。
4）統一運動と統一平和世界の実現

６．結論

B．「神主義」とは何か？

「神主義」は、冷戦後の民主主義と共産主義を超克するイデオロギーである。我々は今やイデオロギーのない時代に生きていると論じる人々がいたり、民主主義が完璧ではないにせよ、それは人類が考え得るかぎりにおいてもっとも優れたシステムだと論ずる人々もいるかもしれない。しかしながら、我々が神主義の新しい時代を迎えつつあり、その時代は冷戦直後にやってくる次の人類歴史段階であると私は言いたいのである。

歴史的変動の速さに対応し、全人類に訪れつつある神主義の時代を迎えるためには、物的世界と心的世界を含め、やがて世界中に現れるであろう、来るべき理想的な人間の生活と社会の青写真を描く必要がある。そしてまた、あらゆる人がそのような理想郷へ近づく方法を知るためには、その理想世界への道路地図を提示ことも必要である。神主義の詳細な内容を公表することは、人類歴史の最終的なイデオロギーとして、このとてつもない歴史的責任をすべて引き受けることになろう。

「神主義」とは、来るべき統一された「世界社会」、すなわち神を中心とする「世界文化」と、神のみ言に基づく統一された「世界憲法」、「世界共同市場」をもつ「神のもとの一つの世界」の指針となるイデオロギーに他ならない。本書の主要内容の最終部分にあたる「完成した世界社会観」において、「神主義」は、理想的な世界社会の先述した内容について、明確で美しい様相を現すことであろう。

神主義の中核をなすのは、「神は人類共通の親であり、人類は一世界家族の兄弟姉妹であり、万物は人類の故郷であり所有である」という思想であり、簡潔に言えば「世界は神を中心とする大家族」あるいは「神のもとの一つの家庭」である。したがって「神主義」は、たとえそれが倫理的、政治的、経済的という三つの主要領域を内に備えているとはいえ、政治中心のイデオロギーでも経済中心のイデオロギーでもなく、倫理中心のイデオロギーである。

『神主義』の四つの構成内容、つまり世界観、生活観、歴史観、世界社会観は、人間の思想の主要な内容である。

この世に生きている誰もが、個をとりまく時空環境についての個人的理解とともに、世界全体と個の人生に関する自身の見方を形成することを常に必要としている。時間環境とは、人類と自分自身の歴史的背景であり、過去・現在・未来である。そして空間環境とは、その人が居住する小さな共同体から、都市や国家を経て、霊界をも含む全世界にまで広がる、個をとりまく社会環境である。『神主義』は、統一教会と統一運動の創始者であられ、真の父母としても知られている文鮮明先生御夫妻によって啓示された神中心の観点をもって、これらすべての領域を隈無く視野に収めることとなろう。

『神主義』のこれら四つの構成要素のうち、最も重要な部分は「完成した人間生活観」と「完成した世

界社会観」である一方で、他の二つの部分はそれらの哲学的基礎である。「世界観」は、他の三つの部分そして「完成した世界社会観」の形而上学的基礎である。また哲学的基礎をなすこれら二つの部分は、近著『統一思想』というテキストのなかで、すでに十分に展開されているが、「完成した人間生活観」および「完成した世界社会観」は『統一思想』という近年のテキストには含まれていない。それは本書『神主義』の主な仕事であり、本書は統一思想に関する近年のテキストの未完部分を補完する具体的内容を提供するはずである。

統一思想に関する近年のテキストには、「完成した人間本性観」を論ずる「本然の人間本性論」はあるものの、「政治論」や「経済論」、「天国論」の各章は存在しない。それでも、「人間本性」は「人間生活」の一部に過ぎず、誰でも、人間存在として、必ずしも己の「人間本性」を内省することなく、「人間生活」の営みを続けている。それゆえ誰でも、人間の存在や精神、人間本性、人生、人間社会に関する理解を内包する自身の人間生活についての洞察が必須となるのである。『神主義』は、『原理講論』と社会科学とに依拠しつつ、統一思想において未着手のこれらすべての部分を扱うことになろう。

キリスト教教義の理論構成は、三つの支柱つまり創造、堕落、救済から成っている。それが絶対的な真理である以上、それは人間の生活や人間の本性、さらには社会科学や人文科学にさえも適合して然るべきである。こうした適用を通じて、哲学と科学は大きな進歩を遂げることであろう。

例えば、「人間本性」という観点から言えば、包括的な議論は、三つの主要部分、つまり「本然の人間本性」と「堕落性」、「本然の人間本性の復帰」を扱うべきであり、「人間生活」に関しては、「本然の人間生活」「堕落した人間生活」「本然の人間生活の復帰」の人間生活に関するこれら三つの部分をすべて理解する必要もあり、こうして我々は人間本性と人間生活の実像を明らかにすることができるのである。

そのうえ、今日の政治と経済の現象もまた、本然の現象ではなく、堕落した状態から本然の状態へと変ずる復帰過程の現象に他ならない。したがって、政治と経済の哲学において、政治的そして経済的な行為の堕落現象から、政治と経済の本然の原理を区別する必要もある。換言すれば、堕落した人間本性の影響を考慮に入れるべきであり、また政治と経済においても堕落した人間本性を扱う必要があるのである。こうして、統一された理想の世界国家と世界政府、世界市場、さらに共有される世界文化の実現への可能性とアプローチとが見えてくるであろう。

C．神主義の世界観的基礎：「心物合一論」「授受法」

１．共産主義と神主義との哲学的基礎の比較

共産主義の理論的構成と同様に、神主義もまた、世界観と生活観、歴史観において堅強な哲学的基礎を備えている。それというのも共産主義は、宇宙と人類史、人生、理想の人間社会に関する真実を明らかすると認められる真理に先立って現れる、真の理論に似た偽りの理論であるからに他ならない。この現象は、統一思想では「真に先立つ偽の法則」と呼ばれている。

理論的に言えば、共産主義は「弁証法的唯物論」という形而上学的基礎のうえに構築されている。しかしながら神主義は、「授受法」に基礎づけられる「心物合一論」、簡潔に言えば「授受法統一論」という形而上学的基礎のうえで成り立っている。「授受法」は、宇宙のあらゆるものと人類のあらゆる振る舞いとを支配する普遍的な法則を示している。また「統一論」つまり「心物合一論」は、神の実在と宇宙の存在との本質を明らかにしている。

カール・マルクスは、哲学史を、最終的には弁証法的唯物論へと至る、唯物論と観念論との闘争史と

して捉えている。しかし神主義は、究極的実在である神が心と物の統一である以上、その対立は、観念論と唯物論の統一で幕を閉じることを主張する。あらゆる存在は神によって創造され、それらは似た存在本質を備えており、それゆえあらゆる存在は心と物の統一でもある。

またカール・マルクスは、唯物弁証法こそ普遍的法則だと主張し、その弁証法が対立し闘争する二つの要素から万物は構成されると論ずる一方で、神主義は、対立や闘争を伴うことのない、対をなす要素間の調和のとれた授受作用こそ普遍的法則であると主張する。

調和と闘争は、普遍的法則に関する相異なる二つの見方であり、サタン的イデオロギーである共産主義は、神を中心とするイデオロギーと対極の観点をとる。また唯物論は無神論の思想体系である一方で、神主義は有神論の思想体系である。共産主義は出発点から、また最も深い基礎において神主義と完全に対立する。神主義が真理と考えると、共産主義は最初から全く偽りの理論である。

共産主義の破綻は、これら形而上学的な基礎、つまり神の存在を否定する唯物論と、対立と闘争が存在と発展の普遍的法則であると主張する弁証法との根本的な誤りからも帰結しているのである。

弁証法的唯物論は、マルキシズムの疎外理論の基礎であり、唯物史観と社会主義的社会論は共産主義の主題である。共産主義運動の目的は、第一段階かつ橋渡し体系としての社会主義的社会の確立を通じて、理想の共産主義社会の実現に努めることである。

同様に、授受法統一論は、人間始祖の堕落や統一史観、天国論を含めた、人間本性と人間生活に関する理論の基礎である。

しかし共産主義とは異なり、神主義は、本然の人間本性、人間生活、理想の人間社会に関するきわめて明確で比類のない描出と理論であり、その一方で共産主義は、理想とする社会主義的社会についての漠然とした知識に過ぎない。また共産主義は人間の本性が存在することを否定し、階級性と人類からの労働疎外について言及しているに過ぎない。

神主義は、本然の人間本性と人間生活、人間の理想社会の明確で美しい青写真を提供するだけでなく、最終目的地―理想の人間と理想の世界に到達するための明確な道路地図を示すのである。神主義は、理想の世界を実現させる方法を強調するだけでなく、理想的な個人になる方法や理想的な家庭をつくる方法を強調するのであり、それらは理想世界を建設するための確固たる基礎なのである。

神とその被造世界についての真の理解を備えた神主義は、正しい形而上学的基礎つまり世界観的基礎をもつのである。

２．神主義の世界観的基礎

１）神は実在し、神はこの世界と人間を創造した。

２）神は心と物の統一であり、陽と陰の合一である。

３）神の創造目的は、人生の目的と宇宙の目的を規定し、人類歴史の目的と方向を決定する。その目的とは、神が世界と人間を創造した時に、神が人類に授けた三大祝福である。

４）普遍的法則は授受法であり、それは全宇宙における調和作用の法則である。

５）神と人間、万物の関係は、真の愛を中心とする調和のとれた授受の関係である。それゆえにすべての関係は愛を中心としており調和がとれており、その関係は神と人間、万物の統一をもたらす。他者との愛と美の授受から生ずる喜びは、あらゆる存在の存在目的の実現である。

６）神が人間に授けた三大祝福は、愛を中心とすることによって理解され得る。一方で神は人間を最も愛し、第一祝福において神は人間にご自身を与え、第二祝福において神は人間に全人類を

与え、第三祝福において神は人間に万物を与える。他方で人間は、第一祝福において神を愛すべきであり、第二祝福において全人類を、第三祝福において万物を愛すべきである。したがって全宇宙は、互いに愛し愛される世界なのである。全宇宙は愛と美にあふれ、神と人間、万物を含む全存在は幸福と喜びを感ずるのである。

D．完成した人間生活観：天人合一論

資本主義における搾取への非難を正当化する単なる道具として人間の本性観や生活観を扱う共産主義とは異なり、神主義は人間の本性観と生活観を、現在の不完全な人類を完成した個人と完成した家庭という最終目的地へと移動するための乗り物として役立てる。共産主義においては、人間の本性観や生活観は資本主義を批判し人々を闘争に駆り立てる単なる道具に過ぎないが、神主義においては、人間生活論は、堕落性の欠陥を克服させ、個人と家庭の完成を実現させるよう人間を導くことができる建設的な道路地図に他ならない。

本章において私は、五つの側面つまり人間存在、人間精神、人間本性、人間生活、人間社会から人間生活を論ずることにしたい。そして各主題において、三つの次元つまり本然の状態、堕落した状態、復帰過程から明らかにすることに努める。こうして読者は、個々人が直視するであろう己の人間生活のあり得るあらゆる状態を理解することができよう。

さらに私は、中国哲学にある美しい哲学用語である「天人合一論」を用いて、この理論をキリスト教教義の創造、堕落、復帰に結びつける。それゆえ私は、創造・堕落・復帰というキリスト教の教えにおける三つの状態に相当する、三つの異なる状況を扱うために、この理論を展開させる。そしてそれは「天人合一」「天人非合一」「天人再合一」となる。

私がこのように列挙して人間生活を扱い、中国哲学とキリスト教教義とを結びつけるアプローチをとる理由は、人間生活の哲学を通じて中国文化とキリスト教文化とを結びつけようと試みるからである。中国文化が人間主義的文化であり、水平的文化であるなら、キリスト教文化は神中心の文化であり、垂直的文化である。それゆえもし我々が二つの文化を調和のとれた統一された一つの文化へと結びつけられるなら、それは完成した世界文化となろう。

統一思想そのものは、完成した人間生活と完成した世界に関する理論の全内容を展開することができる時、その完成に達することであろう。統一思想が西洋哲学の形式で展開されている以上、それがより分析的形式である一方で、中国哲学はより綜合的形式である。西洋哲学は理性によって研究対象を分析し、中国哲学は研究対象が内なる自己であれ外の世界であれ、その人が感ずる事実を記述する。

本章にて私は、統一思想の分析結果を、人間生活の統合された理論を綜合するために用いる。それはすなわち、統一に関する研究成果、とりわけ「本然の人間本性論」、「認識論」、「倫理」、「芸術論」といった諸章を、真善美に関する本然の人間生活の綜合的青写真を描くために用いるということを意味する。

また本章で私は、神がその子らすべてに授けたいと思う豊かな生活を記述するために、勝共理論に示されている統一思想の「物質的価値論」を採用している。

本章の概要を簡単に紹介してみたい。

1）人間存在：a．本然―人間存在は神の子である。

b．堕落―人間存在はサタンの子である。

c．復帰―現代の聖者の夫婦、人類の真の父母を通じて、人間存在は神の子として再生するであろう。

２）人間精神：ａ．本然：本然の心と良心

ｂ．堕落：悪の心

ｃ．復帰：肉欲を否定し、心の力を啓発する宗教的生活

３）人間本性：ａ．本然の人間本性：第三章にて展開した統一思想のとおり。

ｂ．堕落性：原理講論の「人間始祖の堕落」とともに統一思想の「本然の人間本性論」に基づく。

ｃ．本然の人間本性の復帰：宗教的、道徳的、倫理的、教育的な修練による。

４）人間生活：

ａ．愛真善美に関する本然の人間生活と健康と富の生活

ａ）．愛真善美の生活

i. 真の愛の生活：天聖経より

ii. 真理の生活：統一思想の「認識論」より

iii. 善の生活：統一思想の「倫理」より

iv. 美の生活：統一思想の「芸術論」より

ｂ）．健康と冨の生活

i. 健康の生活

ii. 富の生活―人間こそ神によって創造された万物の所有者であると謳う、神が授けた第三祝福によって、誰でも豊かな生活を送ることができる。またマルクス主義の価値論とは対極にある統一思想によって明らかにされる物質的価値論によると、冨の本質が神の創造した万物から生じ、神から受け継いだ人間の創造性は、神の創造物の価値を高めることができることが分かる。本然の世界においては、人間に授けられる神の創造物と神の祝福とによって、あらゆる人が生涯において裕福になることであろう。

誰もが裕福な生活を送るための理論を展開するために、二種類の所有物があることを私は認めている。一つは「人間が利用を楽しむことができる所有物」と、もう一つは「人間が配分することができる所有物」である。誰でも、日光や新鮮な空気、青い空、山や花、海、湖などの美しい景色を楽しむことができる。しかし、ある人が車や家を買いたいと思うなら、お金が必要となる。なお、そのお金は、その人が価値ある創造的活動に寄与することから、また資産を管理することからも得られる。

また科学や技術、経済の発達によって、ひとたびある人が裕福になることを目指して勤勉に働き、お金を科学的に管理するという生活様式に従うなら、「人間が配分することができる所有物」は「あらゆる人が裕福になることができる」という目標に到達することさえも可能なのである。私は、本然の世界において誰もが富める者になることができる可能性と方法とを説明するために、富の創出と配分を分析する四位基台の図式と、富者によって教示される裕福になる科学的方法とを用いている。

ｂ．堕落した人間生活

堕落した人間生活は、仏教やキリスト教、儒教といった世界宗教や共産主義が人々に教示するように、苦痛と罪悪、混沌、無秩序、対立、闘争で満ちあふれ、また人々はそれがあらゆる人の現実の生活体験であるがゆえにそのことを信じている。これらすべての苦痛や問題は、人間始祖のアダムとエバの堕落から生じている。

堕落によって、神を中心とする真の愛は、自己を中心とする偽りの愛へ形を変えている。そして人類は、神の子としての資格を喪失し、神の愛や神の智慧、神の世界、神の祝福を相続することができなくなっている。それゆえ人類は無知に陥り欲深くなり、したがって人類は長い人類歴史において貧困と疾病、戦争に苦しんだのである。

ｃ．本然の人間生活の復帰

姦淫や強欲、利己性は、人間苦の深い根である。堕落性を取り除くための、宗教的、道徳的、倫理的、教育的活動の努力によってのみ、人類は本性と本然の幸福な生活を取り戻すことができる。

完全なる解放は、社会体制の改革だけでは達成することができず、それは意志とともに人間本性の刷新を起こさねばならず、とりわけ自己中心の生活様式から真の愛の生活様式、つまり他者の為に生きることへと完全に転換させなければならない。これが本然の人間生活を復帰する心の側面である。

本然の人間生活を復帰する体の側面は、科学と技術の発達を介してであり、経済と医療の発達により全人類は健康で裕福な本然の生活を取り戻すことが可能となる。このことは、今日の世界ですでに起こっている。しかしながら、そこには十分な愛が欠如しており、多くの人々は依然として貧困と医療不足に苦しんでいるのである。

５）．人間社会：ａ）．本然の地上天国と天上天国
ｂ）．現在の地上地獄と天上地獄
ｃ）．地上天国と天上天国の復帰

Ｅ．歴史観、世界社会観‐天国論、結論

上述の内容は、自著『神主義』の前半の大要である。本書の後半では、「歴史観」および「天国観」について論じられる。

１）．統一史観

統一思想における歴史観は、すでに十分に展開されており、とくに歴史の法則はすでに具体的に提示されてきた。また『神主義』という著書は、全人類を導く新しいイデオロギーに関する理論的なテキストとして構想されており、したがってそれは、人々をして、人類歴史の展開全体に対する明確な見取り図を描かせ、この時代に全人類を救うために現れる真の父母を喜んで歓迎し従う準備をさせるよう、人類発展史の主流を記述するという役割を果たすべきである。

それゆえ私は、歴史観を扱う章において、中心史と周辺史の全摂理史および宗教史と政治史の関係までも記述する長々として段落を用いるつもりはない。最後に、理想の統一平和世界を創建するよう全人類を導く真の父母の来臨を説明し紹介することもまた、著書『神主義』では重要である。
『神主義』のようなイデオロギー的入門書の読者に真の父母を直接的に証をすることは本書にふさわしいことである。いったい誰が全人類を理想世界創建へと導くことができるかもまた、本書で答えられるべき重要な問いである。

２）．完成した世界社会観：天国論

天国には二つある。一つは地上、もう一つは天上である。地上天国は、自然的かつ科学的に歴史発展

をたどって創建されるべきである。そして天上天国もまた、宗教的で哲学的な言葉によって明確にそして論理的に描出されるべきである。こうして全人類は、国籍あるいはその人がどんな指導的地位や分野にいようと関係なく、天国の理想的なビジョンや全体像にすっかり魅了されることであろう。

ａ．地上天国

地上天国は、調和のとれた世界文化、世界共同市場、世界憲法、世界政府、世界国家をもつ平和統一世界であり、共通の神つまり全人類の親を中心とする一大家族という世界社会であるが、それは地上界と霊界との別なく、救世主、全人類の真の父母によって明示される。

i. 世界文化は、神を中心とする真の愛の家庭に基づく新しい文化であり、宗教と科学の統一された文化であり、また東洋文明と西洋文明との統一文明に他ならない。

ii. 世界共同市場は、全ての地域の現実的な関心によって形成されるであろう。欧州共同市場から、欧州共同体を経て、最終的に欧州連合へと至る過程は、より大きな市場統合の必要性と利益に対するもっとも優れた事例である。

統一世界市場では、世界共通ドルが存在し、ちょうど内蔵や四肢、神経すべてが脳の指令に従うように、それは世界政府によって定められた世界共同経済政策と世界金融政策に従うことであろう。世界政府は、神中心の善なる政府でなければならない。

iii. 世界政府は世界憲法にしたがって組織されることになるが、その世界憲法は真の父母であられる文鮮明御夫妻によって人類に啓示された神のみ言に根差すものである。また世界政府は、真の父母によって創設されたアベル国連から展開される。現代における各国の国家政府に加えて、大陸次元の地区政府と世界次元の世界中央政府が存在することであろう。そして全世界は、二院制議会をもつ統一世界国家となるであろう。

世界憲法の中心的役割は、あらゆる次元の政府に、神がすべての人に授けた三大祝福の成就を保証するよう要請することにある。個々人は天国の所有者であり、各家庭は天国の基礎であり、それゆえそれらは世界政府によって平等かつ親身に保護され、十分な配慮がなされるべきである。というのも、誰もが神の息子娘として平等だからである。

iv. 統一運動もしくは真の愛運動は、統一平和理想世界を実現するための、中心的な主導的運動である。

ｂ．天上天国は、天聖経と霊界からの李相憲先生のメッセージとを参照することによって、記述され得る。

Ｆ．結論

世界中のあらゆる宗教的な人々と良心的な人々は、神の力と霊界の力を動員することによって、地上天国と天上天国とを創建する指導的な力になるために、一致団結すべきである。二〇四〇年つまり真のお父様の御聖誕から一二〇年後、一世代四〇年として三代目までに、平和と幸福の本当の天国を創建しようではないか。祝福家庭は、平和大使とともに、天国を創建する国の開拓者および模範的使者となるべきである。そして、自身のうちにある堕落性を取り除ことに努めよ、そうすれば我々は平和と幸福を永遠に手に入れることであろう！